平成２７年度　連合大学院　広域科学教科教育学研究報告書

宗教的エートスが教育に与える影響の研究

教育構造論講座　浅沼　茂
社会系教育講座　加賀美雅弘

１．はじめに

本研究は，アメリカ合衆国におけるアーミッシュやヨーロッパにおけるグリーンに代表される環境主義者たちの生き方と精神生活に注目し，彼らが求める生活とエネルギー消費のモデルを探り，その生き方の現状から，その教育の可能性について検討することをめざして立ち上げられた。

宗教的な倫理が個々人の生活態度を形成し，現代文明に反省を迫る中，そのエコロジカルな生活は，生活のエートスとして将来の地球にとって優しい生き方を提示している。ここでいう生活のエートスとは，単に過去の遺産の博物館的な価値を意味するものではない。それは，人間としての生き方の優しさ，他者への寛容さとして優れた道徳的な価値をもっているのであり，このような倫理的な価値観こそが，環境に優しい人間の生き方の模範を示している。化石燃料の消費やごみの排出がますます拡大する中，文明社会における現代人の生き方を反省し，環境を理解した生き方と関連して構築されるカリキュラムと，それを支える文化的な背景について，特に宗教的エートスが生み出す基盤とのかかわりを踏まえた検討が必要であろう。

以上の課題に向けて本研究は，総合学習において特に課題とされている環境についての意識がどのようなかたちで生まれてきたのか，その教育的影響力を明らかにすることをめざした。当初，本研究はその計画において，研究代表者である浅沼がアメリカ合衆国のアーミッシュ，研究分担者である加賀美がドイツの一般市民をそれぞれ対象にして，彼らの環境意識に関する現地調査を実施する予定であった。しかし，採択の際に研究経費が縮小されたことから，研究計画を大幅に見直し，浅沼は山形県上山市，加賀美は台湾の台中市などでの資料収集を中心にした作業を実施した。そして，日本と海外における学校教育と環境観形成の違いについて，これまで実施してきた総合教育あるいは地理教育に関する検討の成果を踏まえつつ，考察を試みた。

２．日本における総合教育／地理教育による環境観の形成

調査および資料分析により，地域住民の環境への関心が，学校教育における環境教育だけでなく，道徳にかかわる倫理的な価値の教育との関連性が検討された。上山市では，生

活技術の実践としての総合学習などを通して，環境学習を実践するという，日本国内に共通する授業実践がなされ，環境への関心を高める学習が行われてきた。

日本の社会科における教育実践内容を事例に見ると，その傾向をかなり明瞭に浮き彫りにすることができる。たとえば高等学校「地理Ａ」では，複雑にからみ合う地球的課題として，課題の特性とのその解決についての説明がなされている。具体的には，人口問題（人口爆発，少子化・高齢化），資源・エネルギー問題（化石燃料の枯渇），都市・居住問題（スラムや交通渋滞），食料問題（飢餓と飽食）などと環境問題（大気汚染と酸性雨，熱帯林の破壊，砂漠化）との関係が提示されている。これによって地球規模で深刻化しつつある環境問題を総合的にとらえる視点を養い，問題の所在と解決策を考える機会をもつことが期待されている。特に先進国に暮らす生徒にとって，南北問題のような地域格差について積極的に考察を進め，NGO や ODA などの任務と実績を踏まえた課題解決の筋道を検討することは，地球的課題に対する積極的な取り組みの必要性を自覚し，環境問題解決に向けた行動を促すことにもつながるであろう。

このような学習方法は，広範な視野の獲得と幅広い知識の習得を達成することが見込まれる点で，環境問題への関心を十分に高めることが期待できる。現代世界が豊かさを求めて経済活動が活発になればなるほど，じつは環境問題がますます深刻化するという事実に生徒は気づくことになるであろう。世界の多様な地域がそれぞれ異なる環境下にあり，経済活動の事情も大きく異なりながら，環境問題という点で一定の課題を共有していることに気づき，諸地域の課題が単独で起こっているのではなく，地域間で連動し，地球規模の環境問題への発展していることへと学習内容は深化してゆくであろう。

また，家庭から出されるごみや排水，自動車の排気，エアコンによる熱の放散などきわめて身近な生活のありようと地球規模の環境問題とのつながりに目を向けることによって，環境問題が単なる学校での学習の対象にとどまるのではなく，自身が取り組むべき課題としてもとらえやすくなる。身近なスケールとグローバルなスケールとを結びつけることによって，環境とのかかわりを意識した世界のとらえ方を身につけることも期待されよう。この点で地理教育は，環境問題を身近な課題として理解し，人類の将来に向けて考えなければならない切実なテーマとしてとらえることをめざしつつ，一定の成果をあげている。

しかしその反面，こうした学習では，豊かな暮らしを求めることがなぜ環境の汚染につながるのか，暮らしのあり方に問題はないのか，といった点にまで十分に踏み込まれていない。破壊された環境の改善に目が向けられる一方で，レジャーや快適な暮らしといった豊かさを実感できる生活スタイルが追求されながら，それが環境問題とつながる点に必ずしも十分な検討がなされていないように思われる。豊かな暮らしとは何か。環境問題につながりにくい豊かな暮らしはないのか。あるいは，環境への負荷を十分に理解した上で実現可能な豊かな暮らしとは何か。環境問題の根本には，こうした環境と向き合う暮らしについての検討が不可欠なのではなかろうか。

地理教育をはじめとする日本の総合教育では，こうした日常生活における環境ととらえ

方について，必ずしも十分に学習の枠組みにおいてこなかったように思われる。地域ごとに個性ある生活様式や生業についての学習がなされていながら，そうした暮らしのあり方と環境問題が十分に議論されてこなかった。このことが，環境を意識した生活や行動の仕方を考えさせることにつながらず，環境問題に関する学習がともすると問題解決型になりやすく，環境問題の根本的な議論へと発展することを抑えてしまっているのではなかろうか。そこで以下では，海外の事情とあわせた検討によって日本の教育の特性と問題点について考える。

３．海外における環境観形成にかかわる教育

台湾およびドイツの中等教育機関（日本の高等学校に相当する台湾の高級中学，ドイツのギムナジウム）において，地理教育関連の教材に関する調査を実施したところ，いずれにおいても環境問題に関する学習内容がそのボリュームにおいてきわめて多く，重点テーマであることが明らかになった。地球スケールの環境問題が日常の暮らしと密接にかかわっていることを身近なスケールからグローバルなスケールへとつなげて展開させており，この点では日本の地理教育と類似している。国内における資源が限られていることから，世界各地との貿易によって豊かな暮らしが実現していることが説明され，豊かな暮らしが環境への負荷をもたらしている点が重視されている。

その一方で，台湾とドイツのいずれにおいても，環境に負荷をもたらしにくい暮らしに関する学習項目が設定されている点に注目したい。特にドイツでは，化石燃料の消費の縮小，原子力エネルギーから太陽エネルギーへの転換などが政策によって進められ，環境を考慮した生活が実現されている。その結果，国民の多くが豊かな暮らしを実感している。しかし，それは行政による上からの指示によるだけではなく，住民の側にも環境保全に対する積極的な姿勢があることが背景にある。そして，住民の環境を意識した暮らしのあり方を規定する要因として，教育現場における積極的に環境学習をあげることができる。たとえば身近な環境を重視し，徒歩や自転車など化石燃料を使用しない移動，森林の散歩やハイキングなど緑地環境を積極的に活用するレジャーなど，環境を意識した生活のあり方に関する考え方，あるいは価値観を確立する教育がなされている。

さらにここで強調されるべきは，かかる環境学習が，破壊されつつある環境をいかに改善できるかといった問題解決型の学習だけでなく，いかに環境を破壊しない豊かな暮らしが実現できるかといった，よりよい暮らしを課題にしたテーマ設定もなされている点である。このような課題設定では，環境のみに学習の対象を限定するのではなく，環境とかかわりをもつ日常生活に対する考え方，よりよい暮らしのありかたについても考えさせることがねらいとされている。実際にドイツでは，環境を意識した暮らしに関する学習が実践され，学習内容を日常の暮らしに還元させる流れが定着している。

ではなぜ，このような学習が実現されているのであろうか。授業の構成づくりや教材の

開発など教員サイドの取り組みがこうした成果をもたらしていることはいうまでもない。しかし，それだけではなく，生徒の側にもこうした学習を受け入れる素地があるのではなかろうか。

この点に関して，ドイツにおける環境観の形成プロセスを論じたドイツの民俗学者レーマンの指摘は興味深い。レーマン（2005）によれば，ドイツ人の環境観は古来の原始宗教にまでさかのぼるとされる。ドイツ人が森林環境に強い関心を寄せていることはよく知られるが，これは森林と密接にかかわる生業が古くからなされてきたことに理由が求められる。こうした外の環境との関係は，現代のドイツにおいても継承され，日常の生活環境における環境への関心はきわめて高く，グリーンやエコロジー運動などがきわめて活発に展開されているのだという。

このことを踏まえると，こうした環境を意識したドイツ人特有の日常生活が，学校教育における環境教育を成り立たせ，結果として環境理解をさらに深めることにつながっているものと考えることができよう。ドイツの地理教育では近年，人間と環境の関係を一つのシステムとしてとらえようとする傾向が強まっている（山本 2012）が，豊かな暮らしが必ずしも大量生産と大量消費によってもたらされるものではないとする価値観を強化した点に，一つの成果を見ることができる。

こうした住民の環境観が歴史的な経緯をたどりながら確立されてきたことから，ここには独特の宗教観もかかわってきたものと考えることができる。本研究では，そもそもこの点に関する議論を深めることが課題とされたが，今回の調査では時間の制約から十分に検討できなかった。ヨーロッパにおけるキリスト教的エートス，あるいは台湾における道教が住民の環境理解や環境と共存した暮らしといかなる関係にあるのか。宗教的エートスが人々の間に確立されてゆくプロセスを追及しつつ，今後検討されるべき課題である。

４．おわりに

先進諸国において，環境への配慮を重視した生活観が議論されており，マスメディアや学校教育を通じてさまざまな取り組みがなされている。しかし，諸外国における実情は，倫理的な価値観を不問にした日本の総合学習の発展にとって参考となる。

環境観が学校教育の内容によって規定されている中で，日本では，環境問題に関する多くの知識と，問題の所在に関する学習に重点が置かれる傾向が強い。一方，台湾やドイツでは，環境問題はもちろんのこと，環境といかにかかわりつつ日常の暮らしを構築してゆくかという環境観をめぐる考察にも重点が置かれている。ここでは暮らしや人生，人間関係に向けた価値観が強くかかわり，個人の考えを重視する姿勢が不可欠になる。これは共通の知識の共有とその定着をめざす日本の教育のあり方とは大きく異なる点であり，今後の環境教育において十分に検討・考慮されるべきポイントであるように思われる。

地域や国によって異なる環境観が土地に根ざした宗教と密接なかかわりをもつ点につい

ては，今後検討されるべき課題として残された。かつて生物学者デュボスは，より豊かな暮らしとは，地域の環境とともに価値観や宗教観，人生観と密接に絡み合いながら形成・展開されるものであると指摘した（デュボス 1974)。このことを念頭に置きながら，人々の宗教的エートスが環境観をどれだけ規定しているのか，日常生活における宗教観の浸透と確立のプロセスを踏まえつつ，環境理解のための教育と宗教的エートスとの関係に関する議論がなされる必要があろう。

文　献

デュボス，Ｒ．著，長野　敬・新村朋美訳（1974）:『内なる神―人間・風土・文化』蒼樹書房.

山本隆太（2012）: ドイツの地理教育における「システム」論―人間－空間相互関係から人間-環境システムへ．早稲田大学教育学研究科紀要　別冊 21(1)：177-188.

レーマン，Ａ．著，識名章喜・大淵知直訳（2005）:『森のフォークロア―ドイツ人の自然観と森林文化』法政大学出版局.